

生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり

(『修証義』)

四百メートルを越える超高層ビルと、それに激突したジェット旅客機。いずれも二十世紀を象徴する科学技術の華々しい成果ですが、皮肉なことにその科学技術がテロによって悪用され、何千人もの人々の命が奪われ、多くの子供たち、その他の人々が、突然、親や愛する人を失ってしまいました。

楽しかった家庭の中にあっても一寸先がわからない人の命……。健康な若者であっても、突然の事故や病に襲われたり、年を重ねて、老いて死んで行く。我々には、何故このような死があるのでしょうか。はたまた、人は何故この世に生まれて来るのでしょうか。

仏教では、「老」・「病」・「死」の苦の原因である「生」もまた、四苦の一つとして捉えます。そして、「老」と「病」とを、「生」に含まれた事象と考えるならば、人間の苦はつまるところ、「生と死」に集約され、一切のものは、「生じては死(滅)」するという無常觀を同時に説いております。二十世紀の科学技術の結晶もまた無常の風の中にあり、私たち人間も例外なく死に赴く時は死ななければならぬ因縁があります。冒頭の句の「生死を明らめる」ということは、人間は常に「生死」に直面しているという無常の現実を見据え、「生死」の理を知ることであり、科学技術の粹を集めた確固たるものすら、今回のテロ事件で明らかなように脆く悲惨な事実を内在していることを肝に命じることもあります。お釈迦様や祖師方(仏家)は、この「生死を明らめる」ことこそ、一人ひとりの尊厳を守り、悲惨な結果を来さない正しい智慧と生き方が備わる道(一大事因縁)であることを示されました。

この度の事件は、無常を説かれたお釈迦様の教えと警告を、改めて考えさせられる出来事です。そして、「生を明らめ(見据えて)死を明らめて、無常の中に生きる」人としての正しい生き方・考え方を実践していくことが大切だということを、再認識させられました。

犠牲になられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

表題の句は、法事などで皆様にも馴染みの深い『修証義』「第一章総序」の冒頭の句です。道元禪師の書かれた、『正法眼蔵』「諸悪莫作」の中の一節であります。さて、「生」という語は、一般には「生きる」という意味に使いますがここでは、「生まれる」ことを指します。生まれるということは、場所も時間も性別も、何一つ自分の思い通りにはなりません。その意味で四苦の一つに数えられているのです。さらにこの句では、「無常」が説かれています。無常」といって、何かはかなげで、マイナスのイメージがありますが、本来はプラス・マイナス両方の意味があります。「全てのものは移り変わる」ということは、全てのものには固定的なものではなく、「どのようにも変化し得る」可能性を秘めている訳です。ですから、本文で説かれているように、無常の中に生きる現在の積極的な生き方が求められているのです。そして、世界に一つしかない命を、その尊厳をお互いに認め合い、守って行かなければならないのです。

生を明らぬ
死を明らむるは
仏家一大事の
因縁なり

修証義

曹 洞 宗

神奈川県第二宗務所

第五教区 布教部・出版部